人生の良き先達

兼松圭子

昨八月の米寿の祝席での徳永さんの現世のしがらみを越えたような温顔を配した時、その日が近いのではないかと覚悟しましたが、実際に訃報に接して、慈父のごときお姿をもう目にすることができないと思うと、胸に穴のあいたような気持ちになりました。

十数年前、大阪工業英語研究会徳永正勝の名で舞い込んだ一葉のはがき、これが私と大阪工業英語研究会、そして徳永さんとのご縁の始まりでした。退社後、自己流で翻訳の仕事をは始めて数年、「これでよいのだろうかと」自問するも回答の得られない日々の中、見学に出かけたものの、機械、電気と内容はチンプンカンプン、会員はオジサンばかりで、a だ the だと、当時の私にはどうでもよいように思えたささいなことに甲論乙駁、どっと疲れてもどりましたが、研究所でのゼミ以来の知的刺激の場でした。翻訳の仕事はいかにもアウトプットという感じで、積極的にインプットしておかないと、枯渇してしまうとの危機感があり、物は試しとヒヤカシ半分で入会し、今に至った次第です。

徳永さんが水上先生の講義をまとめられた時、水上先生の抜けば玉散る名講義に、徳永さんの師に対する信頼と敬意が添えられた講義録を手にし、その心温まる思いを礼状に託したのが契機となり、お話するようになりました。謡曲、長唄、俳句と多趣味な方で、おそらくそれぞれの習得、精進の過程で身につけられたのでしょう。視野が広く、人生の機微に通じておられました。８８歳で、最後に残った英語を「タイムをすらすら読む」の悲願の下に勉強しておられたお姿は、まさに「かくありたい老後」でした。

この研究会のぎすぎすしたところのない和気あいあいたる雰囲気は、初代会長の徳永さんのお人柄の反映でしょう。英語能力の増進を第一とすれば、もっと戦闘的であるべきかもしれません。しかし、能率第一の現代社会においては悠揚迫らぬふんいきは希少です。こうした雰囲気の温存も含めて、徳永さんがおそらく最後まで心にかけておられたであろう大阪工業英語研究会の今後の発展に、私も微力ながら努めたいと思っています。大きな声を出されることも、自慢なさることもなかった徳永さんの後姿は多くの人々の人生の良き先達と映ったことでしょう。ご冥福をお祈りいたします。